灰塵のイヴ・カメリア

誇大紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰塵のイヴ・カメリア

【Ｎコード】
Ｎ７５１８Ｔ

【作者名】
誇大紫

【あらすじ】
近未来。人間たちは巨大なビルで複数の階層に分かれて暮らしていた。裕福な上層民の生活基盤は死体を原料とした動く〈屍〉に依存している。下層民の作屍屋ライミはそんな〈屍〉の修理を生業としながら、メイドのイヴ・カメリアと暮らしている。そんなある日、失踪した兄ロメロを巡ってライミはカメリアを壊してしまう。

ライミとロメロ（前書き）

ちょっぴりグロなので嫌な方は気をつけてくださいね。

ライミとロメロ

――創造主よ、俺は確かに醜い肉塊かもしれないが、知恵のある肉塊だということを忘れるな。
―『フランケンシュタインの怪物』より―

蛍光グリーンの海から放たれた光がビル群を彩っている。街一つ入るほどの巨大なビル――その中層、小さな窓際に染みだらけのツナギを着た少女が佇んでいる。
黒のショートヘアから覗く耳には翡翠のピアス。ライミは、部屋の中央に突っ伏した成人男〈屍〉を見つめて満足気に微笑んだ。
ゴム手袋を外しマグカップに珈琲を注ぐ。香ばしさが鼻を抜け、同時に生臭さが部屋に充満していることに気がついた。
「カメリア」
名を呼べばすぐにドアが開く。エプロンドレスを着た少女が頭を傾かせて立っていた。傷んだ金髪は裂いたビニール紐のよう。白い肌には所々に斑点が出ていた。蛆がのっそりと這って焦点の合わない左目へ到達する。しかし瞬き一つしない。
「済んだわ。片付けて」
秒針のように、クッと微かな動きで首を振った。
「拒否」
発言とは裏腹に、ふらついた足どりで散らばった工具を片付け始めた。
赤と青のケーブルをクルクルとまとめようとして失敗、文字通り自身の首を絞めてしまう。バッテリーと電極を棚にしまうのに失敗、電流を帯びて痙攣する。白煙が腕から立ち昇る。終始、無表情である。
もたつきながらも血まみれの工具をしまい終えた。血と脳漿の散

ったコンクリート床をモップで拭き取り、ついでに〈屍〉も拭き清めた。
ライミはその一部始終を微笑みながら眺めていた。
「終わった？　ありがとう」
カメリアは首を振る。彼女の頭から蠅が数匹飛び立つ。
「拒否。感謝しなさい」
ライミはうんうんと頷き、棚から殺虫スプレーと脱臭スプレーを取り出しカメリアの全身に振りかけた。程なく耳や鼻からぶよぶよした白虫が数匹出てきて床へ落ちてのたうちまわった。
ライミは彼女の髪から虫の死骸を数匹とりゴミ箱に捨てた。それからその背後にまわり髪を纏めているバレッタに触れた。金髪とは対照的に黒光りするエナメルを撫で上げ、その重みを確かめて嘆息する。
「兄さんに会いたい？」
カメリアはされるがまま、光の無い瞳を揺らして立っている。返事をしないという返事。その本意はライミにもわからない。
ライミは口を押さえて笑い、飲んでいたマグカップを覗く。底にはどろりと溶け切らない珈琲がまだ残っている。

★★★★

ライミには両親の記憶が無い。興味はあったが、同じボ区を歩く親子連れの姿を見たところで羨ましさは微塵も湧かなかった。幼少期はそれよりも毎日が大変だったのだ。
物心ついた時には、たった一人の家族――十歳上のロメロは人間として手遅れだった。極度の寒がりで三重にコートやマフラー、フードで肌も顔も隠し分厚く着膨れした全身を数本のベルトで無理矢理縛って人の形にしている。その姿は初対面のいかなる他人をも警戒させた。
彼は常軌を逸した支離滅裂な振る舞いと確信犯的態度から、もれ

なく同じボ区の者に無視されていた。
　しかしロメロ自身は全く意に介していない。少なくともライミの目にはそう映っていた。誰から引き受けたのかわからないが、死体を動く〈屍〉に加工して賃金を得ていたし、妹を養っていた。そこには彼なりの誇りがあるようだった。
　ロメロはビル内を蜘蛛の巣状に広がる排水兼ダストシュート管の位置を把握し、隠れて自ら梯子を付けて回っていた。本来ならば行ってはならない上階層にも、誰も行きたがらない下階層にも自由自在である。
　幼いライミは何をしているかわからず、兄に疎まれながらついていって管内でよく遊んだものである。
　ロメロはそこで本や雑誌の類を集めていた。ライミは管内の端に座り珍しいものが流れていく様を眺めるのが好きだった。
　何かの破片、食べかす、緑色のゴム、ファッション雑誌、機械片、黒い人形、破れた本、糞尿、膨張した死体、長年使われた果てに崩壊して棄てられたと思しき〈屍〉。管内に時折吹く強風と水流がそれらを運ぶ。その度に兄は吹き飛ばされぬようライミの肩を掴んで身を隠す。
「滑るなよ。落ちたら二度と帰ってこれないアンハッピーだからね」
　大きな衣に包まれ、危険だというのに彼女は少し嬉しかった。
　その日、兄妹は管内に取り付けた足場を伝って上を目指していた。
「さあもうすぐ高級墓地だ」
　彼ら兄妹が住んでいるボ区の上階、テイ区には〈博物庭園〉が広がっている。価値のある美しいものが一堂に集められたとされている庭。ロメロはそこを「高級墓地」と呼んでいた。
「ハッピーも集めると、煮凝りのようで気持ち悪いね」
　そう呟いて舌打ちした。
　管を出ると整然とした庭園がライトアップされて広がっていた。
　ロメロは妹の手を引いてゴミ捨て場から茂みの傍へ駆ける。そこでライミにゆっくり語りかける。

「いいかい、ここの警備〈屍〉は庭園保護のため銃を持てないんだ。警棒だけだ」
暗がりで兄は息を殺して妹に話しかける。
「警棒ってなあに」
ライミは首を傾げて尋ねる。
「うん。だから――」
ロメロは警備〈屍〉が通り掛かったところへ妹を蹴り飛ばした。ライミはその瞬間、彼が足手まといの自分を連れてきた理由を悟った。
「まァ、いいよね？」
兄の軽い口調は今でもライミの耳に残っている。
警備屍とライミの目が合う。数秒間の沈黙のあと、警備屍は逃げ回る彼女を追っていった。見送ったロメロはすぐさま警備〈屍〉詰め所へ向かう。
もう一体の警備〈屍〉を背後から襲い、その首筋の金属製クワガタといった風情の制御装置――〈ハガー〉をギチチと抜き取る。首肉がえぐれるのも構わずに。すぐさま持参した新しいハガーを刺す。そのライトが赤、緑と幾度か点滅した後、警備〈屍〉の身体は震え脳髄が再起動された。
「オール・グリーンだ」
警備〈屍〉は大人しくなり命令を聞くようになった。
「行けッ！」
走り出し、まだライミを追っている同僚の警備〈屍〉の後頭部を警棒で執拗に殴り、すぐに羽交い締めにして捕まえた。
ライミは芝生に倒れこみ、肩で息をしながらチラリと兄を見る。幾重ものフードに隠された表情はわからない。
死ぬほどの目に遭ったが、やはり兄は最高だと思った。常識を逸脱している。妹の瞳にキラキラ星が宿る。
十五歳にして〈屍〉を制御しなおすなど、同じボ区の誰ひとりとしてできない。大人であろうとテイ区よりも更に上、ヘイ区やオツ

区の専門家にしかできないことなのだった。兄は凡人の自分とは違う。
「さ、行くぞ。ただ遊びに来たわけじゃないんだ」
規則正しく刈り取られた茂みの道を、かくれんぼをするように進むと両腕の取れた女性像や羽と触手を持つ怪物の像と出会う。青いスポットライトに照らされた像を見上げ、ヘンな形だと二人は笑う。ショウケースに入った錆びた剣や棺に入った壷を横目に見つつ進むと、あるトンネルの前で空気が一変した。
ライミは足を止め躊躇する。そこはライトの加減で一層暗くなっていた。兄は気にせず足早に行ってしまう。目標としているものに近づいているのだ。
ライミは振り向いたが、先程とはうって変わって見ていた像が恐ろしい。無表情の像が迫ってくるようで、走って兄を追った。
通路の両脇に名前・誕生年・没年が書かれたプレートが一定間隔で並んでいる。その下にはそれぞれ大きな水槽があった。
ロメロはスイッチを切ってはそれらの蓋を片っ端から開けていき、溢れ出した保存液に濡れて笑っていた。ライミは自分の方へじわじわ近付いてくる蛍光グリーンの水溜まりから後ずさる。
「ものの本によれば、ネクロフィリアの原体験は母親の寝顔に恋することにあるらしい。全ての道はマザコンに通ずとはよく言ったものだね」
ロメロは自分に言い聞かせるように呟き、目当ての水槽の前に立った。フードを取り一礼すると、中性的な顔が仄かな蛍光色に浮かび上がる。頬には生まれながらの大きな痣があった。
「そんなことを言うなんてきっと大昔の心理学者は頭がハッピーなロマンチストだったんだな」
蓋を丁寧に開き、防腐処理の施してある金髪の少女――十五歳といったところだ――の手を恭しく持ち上げる。液体が糸を引く。少女の肌は白く、血液が流れていない分、むしろ青かった。
「兄さん、何をしているの」

滅多に見せない素顔を晒しているのだ。ただならぬ様子にライミは不安になった。
「さて何をしているんだろうね。少なくとも、美しいことじゃあないが」
彼は遺体の手にキスをして微笑む。水槽の縁に手をかけ、ライミへ振り返った。
ロメロの目許が隠れたまま声だけが朗々と響く。
「ライミライミライミ、僕は女の子のボディが心底好きなんだ。誰でも良いわけじゃあないが、その個人差も含めて死ぬほど好きだ。愛していると言ってもいい。鎖骨の凹みに溜まった汗で泳ぎたい。冷たく白い肩にオリーブ油を塗って滑りたい。うなじに生えた産毛を一本一本ねぶりたい。水彩絵の具のパレットに『乳輪色』という色をいつも置いておきたい。洞窟に潜む化物じみた複雑な構造の性器。奥に内臓のうねりを感じさせる臍。丸みを帯びた胸から腰への曲線なんか完璧な造形で泣きたくなるよ。でも文化的には虐殺したくなるほど大嫌いだ。大事なのはボディ。だからここは一つ徹底的に――完膚なきまでに僕に忠実で従順な女〈屍〉を作ってやろうと思ったのさ」
彼はポケットからハガーを取り出し、少女のうなじを舐めて唾液をたっぷりつけ一気に先端を突き刺した。
「というのは全部後付けで、つまるところ――この可愛い娘に一目惚れしちまったから屍姦がしたいだけなんだ、僕はッ！」
ハガーは自動的に深く先端を内部へと伸ばし、かえしを出して抜けないように体を固定した。
「彼女の冷たい身体で僕の熱いハッピーを受け入れてもらいたいんだ」
やがて少女は釣り上げられた魚のように口をパクパクさせて痙攣し始めた。ロメロは嬉しそうに見守る。すぐにハガーの点滅が終わり、〈屍〉は青い目を開いた。
「ハッピーバースデイ、イヴ・カメリア。服を着るかい。僕はその

ままでも全く構わないけれど」
ロメロはコートを一枚脱いで肩から着せた。少女はゆらゆらと揺れながら無表情に周囲を見回した。
「拒否。さよなら」
そう言って血に汚れた彼の手をとった。ロメロは何かブツブツ呟きながら顔を近づける。
薄暗闇ではあったが、ライミは見ていられず目を背けていた。所在無く佇むことしかできない。動悸を押し殺すように小さな胸を掴んだ。
恐らく、二人はキスしていた。

ライミとロメロ（後書き）

読んで頂きありがとうございます。宜しければ感想などお願いします。

イヴ・カメリアの崩壊

★★★★

あまりの冷気に目を覚ますと、窓の外には発砲スチロール片のような雪がちらついていた。

最近の記録的な寒さのせいで、ホームレスの多いここボ区や最下層キ区では凍死する人間が激増していた。その影響でライミのような作〈屍〉屋は若くて新鮮な死体がかなり安く手に入るようになっていた。

倉庫を改装した店は事務室といえど文字通り死ぬほど寒く、ライミは自分も明日にはそうした死体の一つとして市場に流れているかもしれないとよく考える。それも仕方ない。自分の死体がカメリアのように飾られる価値があるとは到底思えなかった。

ソファで膝を抱いて震えているとカメリアが珈琲を盆に乗せ、揺れながら持ってきた。エプロンドレスには先程作ったらしい、珈琲の染みがあった。

「ありがと。よく眠れた？」

〈屍〉に取り付けられたハガーは、余った時間で情報整理のためのスリープ状態になる。

「拒否。良い夢を見ました」

「どっちだよ」

ライミは毎朝このやり取りをして笑うのだった。

昼過ぎに客が回収にやってくると、ライミは男〈屍〉に命令して立ち上がらせた。身長はライミより遥かに高い。昨晩修理したものだ。

男〈屍〉は始終ゲップをするように唸った。その視線は奥で事務をしているカメリアに注がれていた。彼女は書類を整理していたが、誰がどう見ても散らかしているだけである。

男〈屍〉の視線に気付くも特に反応は無い。
「右目が腐って動かなくなってたんで、カメラと取り替えておきました」
痩せぎすの客が興味なさげに、あらそうふうんと頷く。身嗜みの整った上品な佇まいはツナギ姿のライミとは対照的だ。
「この子、生前は天然物ばっかり食べてたみたいですね。だから腐りやすいんです。全身を防腐液に浸して、各部に超音波発生器を埋め込んで防虫処理もしておきましたからもう大丈夫ですよ」
女が男〈屍〉に歩み寄る。決して触ろうとはしない。細い首に掛かった大粒真珠のネックレスがざらざらと鳴った。
「ねえ。最近は新しい〈屍〉を作った方が修理より安くできるって聞いたのだけど、どうなのかしら？」
ライミは黙って耳のピアスを揉むように弄る。
「そうなんですが、ウチではできないんですよ」
ライミは既に兄がカメリアを作った時と同じ十六歳になっていたが、修理程度しかできない。
「あらでもこの〈屍〉、ここで作ってもらったのよ」
返事に迷ってタイミングを逃したあげく、困った顔で乾いた笑いを漏らした。なにもかもがチグハグだ。
「じゃあこの男〈屍〉は兄が作ったものですね。今は兄がちょっと行方不明で。全くあの野郎、何処をほっつき歩いてるのか」
「お兄ちゃん、帰ってこないの？」
女はまじまじと奥のカメリアを見ている。通常ではありえない失敗ばかりの女〈屍〉を。
「あなた一人で大丈夫なの？　あんな〈屍〉しか作れなくて修理だけでやっていけるの？」
ぐ、と口許に力が入る。どう言ったものか逡巡して、ライミは軽く目を閉じた。
「大丈夫じゃなければどうなんだ？　ヘイ区のあんたがボ区のアンハッピーを助けてくれるのか？　どの口が大丈夫かなんて排泄物み

たいな台詞をひり出してるのかな？　安寧の位置から心配するふりをして不安を煽るのは犯罪にも等しい行為だからわかったら帰れよ成金欺瞞脱糞ババアが！」

ロメロならそう言うだろうと思った。ライミは拳を握って目を開く。

「あれも兄が作った〈屍〉なんですよ……ハハ。や、どうもありがとうございます」

客が帰った後、ライミは書類を散らかし続けるカメリアに辟易する。今日は特に調子が悪く命令系統が錯綜しているのか、拾ってはすぐに床に捨てている。

横顔を覗き込めば、人々の注目を集める無駄に整った顔立ち。耳には蛆が出入りしている。

ロメロに愛された唯一の存在にして唯一の失敗作――イヴ・カメリアは今日も黙々と、何を考えているのかわからない。

ライミは事務机に座り、ツナギに張り付いて乾いた肉片をカリカリと爪の先で削り落とす。

「まだ片付けてるの？」

カメリアはライミを見ない。髪留めの黒いバレッタが鈍い光を反射した。

兄はカメリアと暮らし始めて一年も経たず、置き手紙すらなく失踪した。翌朝、カメリアにバレッタが残されていたのだ。

ライミは思う。

カメリアの持つ「糸」は少なくとも自分のものより太く、遠い兄へと繋がっているが、自分には誰にも繋がらないあるかなきかの「糸」しかない。

愛情の所在。誰かに必要とされること。他でもない誰かに。その証明。

「カメリアは兄さんに会いたいの？」

ライミは傍にあった四角いバッテリーを弄りながら、幾度となく繰り返してきた言葉を呟いた。

「兄さんが好き？　嫌い？」
顔を上げるとカメリアが音もなく立っていた。
「拒否」
俯いた顔は逆光でライミにはよく見えない。
「でも兄さんは私達を置いて……」
ふとライミはバレッタを見て気付く。
違う。置いていかれたのは「私達」ではなく「私」だけだ。
「拒否。良い夢が来た」
そう言って突然カメリアはバレッタを髪の毛ごと毟り取ると投げ捨てた。それは壁に当たってゴミ箱に入る。まるでスローモーションのように、ライミの瞳には映った。
ライミは後になっても、どうして自分がそんなことをしてしまったのかわからない。カメリアの謎の行動は今に始まった話ではないのだ。実際、ライミの唇はクスリと笑っていつも通り「どっちだよ」と言っていた。
彼女は思い知る。
自分には日々の生活で貯まっていく黒いノイズがあるということを。それは無意識へ澱のように積もって内臓を圧迫する。
彼女は思い知るのだ。
それはいつか確実に臨界が訪れ、ふとある種のタイミングが重なった拍子に暗い衝動として吐き出されることを。
気づけば、ライミはバッテリーをカメリアの頭に投げ付けていた。骨も肉も腐った頭は柔らかく、五分の一ほどが豆腐のように潰れて吹き飛んだ。脳漿を晒してフラフラと佇んでいる。
「初めまして」
カメリアは腕をまわして首筋にあるハガーを自ら引き抜いた。途端に床に倒れこみ、うどん玉のようなものが頭から零れる。イチジクを剥いたようにえぐれたうなじに白い骨片が覗く。
多くの場合、無理矢理引き抜かれたハガーは二度と動かなくなる。今、それは床を転がり、肉を求めて先端を小刻みに震わせている。

「違う、違う……！」
ライミは慌てて近寄り、床に散った脳をかき集めて頭に戻す。手が血まみれになり脂でヌルヌル滑る。構わずカメリアの首にハガーを刺して再起動する。
自殺する〈屍〉などいない。それが常識である。ライミも聞いたことがない。そもそも命令を聞いて動くだけの労働力である。簡単に自殺などできないように自己防衛設定がなされているはずなのだ。
ハガーのライトが真っ赤になって停止する。もう一度再起動スイッチを押してみるが結果は同じ。何度も試す。壁にかけた時計の音が妙にライミの耳に迫る。
「なんで……私は」
後悔が嗚咽となって溢れ出しかけた時、ライトが緑になった。ライミは奇跡に感謝してホッと息を吐いた。
目覚めたカメリアは優雅な身のこなしで立ち上がり、優しくライミの頬を撫でた。その身体は震えもせずぴんと立っている。
「なんて哀しそうな顔をしていらっしゃるの。いったい誰がそんなことを？　プンプンですわね。そんな輩、わたくしが懲らしめて差し上げますわ」
ライミは困惑して、この美しい女屍をただ見つめることしかできなかった。

今すぐ博物庭園に参りましょう

★★★★

最上層の光〈コウ〉区から、御都〈オツ〉区、平〈ヘイ〉区、庭〈テイ〉区、暮〈ボ〉区――そして最下層の基〈キ〉区。

人々はそれぞれ生まれた層とそれより下層へは自由に行き来できるが、逆に上層へ行くことは原則できないようにされ、禁止されている。

しかし気づけば部屋を飛ぶ羽虫のように――どこからか人々は行き来しているようで、時々捕まる人間がいる。

オツ区の教会警察が各地を厳しく取り締まっており、彼らに見つかると市場にすら出回ることなく「最も新鮮な死体」として作〈屍〉屋に回される。

その仕事は教会警察から、通常はオツ区の作〈屍〉屋に頼まれる。そこへどんな繋がりがあったかは計り知れないが、ライミは兄がその仕事を裏で回してもらい、幾つかこなしていたことを覚えている。やたらと払いの良い仕事だった。

ロメロの作〈屍〉の特徴として、彼は個々の死体に合わせてハガーを微調整・製作していた。筋肉の微妙な張り具合や骨の形から生前の癖を見抜いていたのである。

そんな労力のいらない楽で美味しい仕事。下層民には嫌われる仕事。

死体となる前に素材の様子をチェックすると、教会警察が外傷のないように処刑してすぐに回してくる。最も新鮮な死体を使うことができるこの仕事は楽勝だと言っていた。

ロメロは女の死体だと特に上機嫌で、口笛を吹きながらハガーを刺し、噴き出した血をシャワーのように浴びる。

そんな兄をもってしても「明日は我が身だけどね」とこぼしたの

がライミの記憶に残っている。
「警察沙汰は面倒だな……」
ライミは今、踏みしめるようにダストシュート管を上っていた。久しぶりに来た管内は、暗闇を果てしなく感じていた昔ほど恐ろしくない。
遥か上を行くイヴ・カメリアは何かに憑かれたとしか思えないほどの躁状態である。まるで息を吸って吐くことが快楽だとでもいうように。口笛まじりにこの世の全てを楽しんでいる様子である。
「見てみて！　都市伝説かと思っていたのだけれど、こういうものって本当に存在するのねえ！」
落ちていたポルノ雑誌を指先で摘んで拾い上げ、懐中電灯の先で数ページ繰って排水に投げ捨てる。壁に張り付いたゴキブリの集団や太ったネズミが微かに動いた。
振り返ったカメリアが疲労困憊のライミを見て不機嫌そうに告げる。
「早くしないと置いていきますことよ」
ライミのヘルメットに付けたライトが、染みだらけのスカートやブーツを照らし出した。
「はいはい……」
腐敗したゴミを蹴飛ばしながら進む。どうしてこうなったのか考えてみるが、まだ頭が混乱していた。

★★★★

「薄汚れてますけれど、こんな安っぽい服も可愛いらしくて素敵ですわね」
再起動したイヴ・カメリアはエプロンドレスのフリルを指先で摘むと、その場で軽く舞ってみせた。金髪が軌跡を残してふわりと開き、蠅が舞う。それからスカートを持ち上げて会釈をした。
「御機嫌よう。ここはどこ？　貴方は誰？」

「じっとしてて」
ライミは無言でカメリアのハガーを確認した。一部を開いて調べてみたが、兄ならではの曲がりくねった妙な部品と不可解な組み方でよくわからない。下手に弄れば二度と起動しなくなる可能性が大きかった。
頭を掻いてため息を吐いた。
「で……何だって？」
カメリアはムッとした。
「殿方から名乗りなさいな」
「私は女ですが」
カメリアは目を丸くした。それからたっぷりと時間をかけてライミのツナギ姿を不躾に見回し、ひとり何度も頷いた。
「わたくしは――ええと？　オツ区の――オツ区の。あれ。思い出せませんわ。記憶喪失かしらそれとも？」
「オツ区？　ここはボ区だよ。頭がおイカレになったのかしらそれとも」
ライミは口調を真似て皮肉ったが、すぐさま足を踏まれる。
「先程の涙が消えたようで結構ですわね」
「泣いてない！」
カメリアは相手の心を見透かそうとでもしているのか、顔を近づけて凝視する。ライミは鈍く鼻にまとわりついてくる腐臭に顔をしかめる。
「わたくしはどうなったのですか。知っていることをお話しなさい」
ライミはカメリアの圧倒的な態度に押され、ことの経緯を一から話してやった。
「テイ区の博物庭園に展示されて……そうですか。わたくしは高い身分の〈屍〉のようですわね」
じゃなきゃその口調は何なんだよ。ライミはそう言いかけたが黙っていた。
胸の前で小さく手を叩き、カメリアは歩き出す。

「では今からそこへ参りましょう。こんな小屋は貴女も息苦しいでしょう」
「小屋じゃない。私のウチ！」
彼女は話を聞かずに、勝手にライミのブーツを履いて微笑みを浮かべた。
「そうそう。聞きそびれていましたけれど、お名前は？」

★★★★

ゴミ捨て場から這い出てテイ区、博物庭園に着く。そこは変わり果て以前の面影は全くなかった。至る所へバリケードが作られ中心部へ入ることができない。
「困ったな……」
堆く積まれたガラクタを前に悩むライミだったが、不意にその肩にブーツが乗った。カメリアはそこから跳躍してバリケードの頂上付近に取り付いた。
「ちょっと人を踏み台にしといて、何か一言あるでしょ」
ライミが下から怒鳴る。
「わ。〈屍〉達がお互いに喰い合ってますわ」
博物庭園は暴走した〈屍〉達により混沌と化していた。〈屍〉自身がハガーを持ってお互いの首筋を狙う。お互いの肉体を喰い合う。比較的新しい死体は服装から教会警察だとわかる。止めようとして巻き込まれたのだ。
ライミは眉間にしわを寄せた。
「テイ区は改装で一時的に立入禁止になってるって聞いてたんだけど」
「コウ区が各層に手配して隠しているのかしらそれとも。でも何故……？」
カメリアの手を借りて、ライミもそっとバリケードを越える。〈屍〉に見つかれば喰われるかハガーを刺されて彼らの仲間に加わる

か、である。
二人はかつての兄妹のように茂みを縫って進んだ。トンネルまでやってきた時、先行していたライミが、転がっていた女〈屍〉の右脚に躓いて声をあげた。
周囲の〈屍〉たちが一斉に振り向く。ほぼ同時に、カメリアは慌てて彼女の口を塞いで茂みへと引き倒した。陰から辺りに目を走らせた。
すぐに腹の出た男〈屍〉が一体、足を引きずってノソノソやってきた。バリケードの一部だったのだろう、モップを引きずっている。その先には肉片と血が滴る。低く呻きながら傍の茂みを見つめた。
ガサ。
微かに揺れた箇所へモップを突き刺す。引き抜いて執拗に幾度となく突き続けた後、茂みを掻き分けて覗いた。そこで女〈屍〉の右脚を見つけ、むしゃぶりついた。
ライミ達は「エサ」に男〈屍〉が夢中になっている隙にトンネルへと入った。そこには何もなかった。
「片付けられちゃったのかな」
ライミは兄がやったことを思い出していた。ここに展示されていた上層民の死体は片っ端から保存装置の電源を止めていったが、全てをカメリアのように〈屍〉にしたわけではない。
恐らくそれらは美しさが損なわれたことで「廃棄」されてしまったのだ。とはいえ、十年ほど前のことである。何故新しい「展示物」が運び込まれていないのかもわからなかった。もしかすると、上層でもここテイ区のように何か起きているのかもしれなかった。
「ねえ、少しよろしい？」
ライミは肩を叩かれて振り向いた。
「見て……嬉しいわ。わたくしは大切にされていたようですわね」
カメリアは壁にある貼紙を剥がすと、顔の横に並べて見せた。貼紙には「死体探してます」と題され、瞼を閉じたカメリアの写真が印刷されていた。

ステイシーは友人の夢を見るか？

最上層から最下層まで届く巨大エレベーター。それが公式では唯一の各階層を繋ぐ移動手段である。

天地を貫く深緑色のエレベーター柱は、まるで海底神殿に置き去りにされたオベリスクのようだ。

「死体探してますーーねえ？」

張り紙の主と連絡をとった二人は、バリケードの上でエレベーターの入口を見張っていた。イヴ・カメリアは膝を曲げて座り、張り紙に写った自分の顔をじっと見ていた。

「やっぱりカメリアは身分が高いんだね。私が死んでも多分誰も展示なんてしやしないだろうし、女〈屍〉にされても結局どこぞの屍姦愛好家の性処理玩具ってとこだろうし。ねえ」

そうぼやき、ライミは下から海藻のようにワラワラと纏わり付く〈屍〉達の手を避けている。

「死んでいるのだから無意味ですわ。展示されたって嬉しくなんかないのですもの」

「展示されてた側の人から聞いてもなー」

カメリアはよじ登ろうとする手をブーツの先で踏みつけにした。それはごく自然な動作である。

ライミは溜息を吐く。

「つくづく世界って不平等よね」

「そうですわね。残念な容姿に残念な頭の貴女を見ていると本当に人間は生まれながらに不平等だと思います。お可哀想に」

「丁寧なのは口調だけかい！」

しかしうまく否定できない自分を抱えるライミである。容姿はともかく、ボ区の中では頭が悪い方ではない。しかし、ボ区全体が教育などあってないようなものだったことや兄のことを考えるとジクジクと傷口に膿がわいたような気分になる。

「そんなに展示されたいのですか？」
おおおぉ。おおおぉ。
ライミはうなり声の方へ振り向く。上がってきた女〈屍〉を見るや、傍にあったモップを拾い、柄でその頭を突く。左目に刺さり後頭部に突き抜けた。モップから頭を蹴り剥がすと、崩れ落ち地面に当たって軽く跳ねた。頭から落ちたせいで、まるで潰れたトマトのようだった。
「ちがーう。展示ってか大切にされたいってこと」
自分で言っておきながら、彼女は「そういうことなのか」と改めて妙に納得した。
「なるほど。無価値な死体とはいえ、生前の者に向けた感情はどうしようもないですものね。展示するというのも、そういうことなのですね」
「そんな難しい話かなー」
ライミは腕をこまねいて、首を捻った。
「ボ区では違うようですが、法や政治を司るコウ区や私のようなオツ区の人々は教えを受けるのです。生まれてくるあまねく人々は神の下に平等だと。死ねば魂は抜け出し、死体はただのタンパク質の肉塊となり、生前の価値は無に帰されることで平等となると。それを根拠として死体はどう扱っても良いということになっているのです。死体は〈屍〉として再利用され、或いは棄てられ燃やされて灰や塵となるか」
「でも展示される死体があるってのは矛盾してるんじゃないの」
二人の見下ろす先には、カメリアが展示されていた場所への入口が見える。
「だから……博物庭園がこんなことになっているのはもしかしたらそこのところに問題があるのではないかしらそれとも」
カメリアは記憶の底に現れては消えていくオツ区の風景を思い出していた。霞がかったような人々が、博物庭園の展示死体の存在に対して議論していた。

「お嬢様！　　ああ、ステイシーお嬢様！」
大声を上げて、スーツを着た初老の男がエレベーターから出てきた。どうやらカメリアを探していた者らしい。ライミは眉をひそめた。
「ステイシィー？」
カメリアの方を見ると、神妙な顔つきである。
「思い出した。わたくしの名だわ。そういう貴方はもしやルチオ？」
会えなかった時間を噛みしめるように深々とお辞儀をした。
「そうですお嬢様。お久しゅうございます。前々からお身体が弱くございましたから、心配で心配で。お元気そうでなによりです」
「ええ！　　死んでること以外は特に問題ないわ。それからこの娘にはお世話になっていて……」
ステイシーお嬢様とやらに手を引かれ、ライミはバリケードからエレベーターへ近づく。チラリと見えたエレベーターの奥には、赤い制服を着た男たちが数人いた。
「貴女はもしやロメロさんの妹さんの、ライミさんですかな？」
「あ、兄を知っているんですか！」
ライミが降りてきたところを見計らい、ルチオはエレベーターの男たちに合図を出した。嫌な予感がしたが、ライミは逃げ出さなかった。赤い制服の男たちは全員自動小銃を抱えていたからである。カメリアの前にも男が二人立ち塞がった。
「知っておりますよ。よぉ～くね」
ライミは屈強な男たちに両脇を抱えられるようにエレベーターへ連れられ、制服の胸に「教会警察」と書かれているのを見て、やっぱりかと思った。
「私悪いことしてないのに……　と思ったけどしてたわゴメン。ボ区より上の階に来たこと。や、常習してると犯罪だってこと忘れちゃうね」
兄の真似をして軽口を叩いてみたが、赤服たちは何も返さない。経緯は知らないがヤバさだけはわかった。

最も新鮮な死体、という言葉が頭を巡る。エレベーターのスイッチが押される。無情な音を立てて重苦しいドアが閉まり、同時に光が消えた。

その間中ずっと、カメリアはひたすら抵抗して叫び続けていた。

「離して！　あの娘はわたくしのーーその、友人なのよ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7518t/

灰塵のイヴ・カメリア

2011年11月9日03時17分発行